

動向

中国における中日語彙対照研究の動向 2020

施 暉

はじめに

文化や経済といった領域における中日両国の交流は2千年以上も保たれてきたとともに、両国の言語上の交流と借用も綿々と続いている。それ故に、言語文化において多くの類似点を呈出しているのである。しかしながら、中国語と日本語は異なる語族に属するのみならず、両国の自然風土や社会文化などにおいては独自性があるがゆえに、音声から語彙、意味、文法、語用まで様々な面で顕著な相違も現れている。中日言語対照研究の主要な目的は、両言語の共通点、なかんずく相違点を記述、解明したうえで、発見や結論などが関連分野への活用もできることにあると考えられる。「言語の基本要素としての語彙は言語システムを支える柱である。そのため、文化的特徴は語彙を通じて最も著しく反映される」(呉国華・楊喜昌2000: 40)と指摘されるように、中日語彙を研究対象に、同質の比較を展開していくことは、異なる言語構造と社会文化への認識、把握ひいては両国の交流史の解明に益するものと考えられる。

本稿では、例年の検索方法を踏襲し、「中国知網」(CNKI <https://www.cnki.net>)で、「日本語」、「中日」並びに「日中」などをキーワードとして、2019年下半期から2020年上半期にかけて発表された研究論文等を検索したところ、中日語彙対照研究に関する論文を23本選出できた。研究対象の内訳は表1の通りである。一方、「全国図書館参考諮問連盟」(全国图书馆参考

表1 2019-2020年中国における中日語彙対照研究の内訳

	数量	研究内容・テーマ				
		音声	文法・語構成	翻訳	語史	意味
学術論文	23	2	2	5	10	4
国家政府の研究助成金	1	現代汉语新词语の日本传播研究（一般項目、代表者：常志斌） 日本における現代新漢語の伝播についての研究				

咨询联盟 <http://www.ucdrs.superlib.net>) を利用し、中日語彙対照研究に関する著書を調べてみると2冊ヒットした。さらに、2020年度の国家政府の研究助成金の中には、中日語彙に関するテーマが1つあった。その詳細は表1の如しである。

1. 学術論文

以下、表1に示したように、今回検出できた学術論文を音声、文法・語構成、翻訳、語史と意味に分け、それらの主旨を抽出したうえで、レビューしながら中日語彙研究の動向を紹介することとする。

1.1 音声

李寧《《唐話纂要》唐音同字异读及其日本特色（『唐話纂要』における唐音の同形異音及びその日本の特徴）》は、江戸時代に編纂された『唐話纂要』をテキストに、唐音の同形異音という事象を検討した。同形異音の成因について、仮名表記法の問題、違った漢語方言の混入、不安定な音声感知など、あわせて9つ挙げられている。また、一般的な意味と用法の違いによる漢字の同形異音とは異なり、江戸時代の日本社会及び18世紀あたりの盛んな中日言語交流の実態は、『唐話纂要』における同形異音という現象の背後に隠れていると指摘した。

費曉東《中日同形词听觉加工机制研究（中日同形語の聴覚処理メカニズムについての研究）》という論文は、中国語を母語とする日本語学習者を対象に、語彙判断課題を用いた実験的検討をすることによって、以下のことを明

らかにした。中日同形異義語の意味を処理する過程において、一つは中国語の意味は刺激により迅速に活性化され、抑制効果が生じる場合、音韻類似性の高い同形異義語による抑制は、音韻類似性の低い同形異義語より強い。二つ目は中国語の音韻の場合、音韻類似性の高い同形異義語は中国語の音韻と意味による二重抑制の影響を受ける、ということである。

1.2 文法・語構成

査雁豪・王忻《基于语料库的汉日“超～”的语法化对比研究（コーパスに基づく「超～」の文法化についての中日対照研究）》は、日本語の「日本語歴史コーパス」や中国語の「BCC コーパス検索システム」といったコーパスから例文を抽出し、中日両言語における“超～”／「超～」の文法化について、通時的、かつ個別的に分析したうえで、中日比較を行った。主な異同点は以下のようにまとめられる。共通点については、1) 文法化の過程は両言語で似ている。2) 接頭辞の使い方の普及は両言語とも現代以降のことである。一方、相違点は、1) 動詞、形容詞並びに接頭辞の使い方は、中国語の方が早い。2) 接頭辞の使い方の普及は、日本語の方が早い。3) 中国語の“超～”の意味は日本語より豊富である。

周彤《汉日同形反义复合词的构成与词汇特征（中日同形対義複合語の構成と語彙の特徴）》は、中日両国の辞書及びコーパスから集めた“男女”／「男女」「古今」／「古今」のような236組の中日同形対義複合語を中心に、語構成や語彙の特徴など、多角的視点から中日言語間の異同点を深く掘り出した。結論として、以下のことが指摘されている。同形対義複合語の内部構造からみれば、主に名詞と名詞、動詞と動詞、また形容詞と形容詞の複合である。なおかつ空間や時間、関係、性質といった概念を表す語素の複合が多く見られる。勿論、中日同形対義複合語の間には相違点も存在する。例えば、語構成について、中国語より日本語の方が豊富であるとはいえ、凝縮の能力は中国語ほど強くはない。また語素の品詞について、日本語は殆ど名詞と名詞の複合であり、中国語のような多様性は少ないようである。

1.3 翻訳

張春麗《从跨文化交际的角度看日语猫谚的翻译——以归化与异化翻译策略为中心（異文化コミュニケーションにおける日本語の猫に関することわざについての翻訳——「帰化」(Domestication)と「異化」(Foreignization)の翻訳ストラテジーを中心に)》は、日本語における猫のことわざを中国語に翻訳するストラテジーを考察した。民族文化の結晶と呼ばれていることわざを翻訳する際に望ましい効果を実現させるには、異文化コミュニケーションの視座に立ちながら、「帰化」と「異化」といった2つの翻訳ストラテジーを併用する必要があると提案した。翻訳法における「帰化」とは、つまり source culture (起点文化)の異文化的特質を翻訳の中にも保持するためのストラテジーである。一方、「異化」はその逆で、原文の異文化的特質を target culture (目標文化)に即した形に馴化させようとするストラテジーのことである。

何宝年・匡伶《中日同形詞翻譯對比研究——以“精神”/「精神」為例（中日同形語の翻訳についての対照研究——“精神”/「精神」を一例に)》は、講談社の『中日辞書』と『日中辞書』から“精神”/「精神」に関する例文と訳文を同時に抽出し、対照分析を行うことによって、“精神”/「精神」の中日、日中翻訳の実態の究明を試みた。また、中日同形語の翻訳ストラテジーを帰納してみた。総じていえば、「直訳」は意味と用法が全く同じである同形語の翻訳にしか適用されていない。意味と用法に違いがある場合は、「直訳」と「意訳」のストラテジーを同時に使用しないと見解を述べている。

劉健《中国共产党文献日译本中的汉日同形词——以《习近平谈治国理政》日译本中的“四字格”词为例（中国共産党文献の日本語訳本における中日同形語——日本語訳の『習近平談治国理政』における「四文字語彙」を一例に)》は、日本語訳の『習近平談治国理政』を研究対象に、訳本における「四文字語彙」の分布状況についての計量的分析、また原本との対照によって、「四文字語彙」の日本語訳の特徴と翻訳問題を浮き彫りにした。結論は2点ある。1) 直訳はある程度で必要であるが、読者の実際のニーズを考慮

しながら意識することも不可欠である。2) 翻訳は言葉だけではなく、修辞、文脈、談話、文体なども緊密に繋がっているため、翻訳者はそれらの要素を十分に吟味しながら翻訳すべきであると論じている。

李鈺婧《中央文献外译的跨文化交际策略——以十九大报告中“实践”一词的日译为例（中央文献の翻訳における異文化コミュニケーションストラテジー——十九大報告書における“实践”の日本語訳を中心に）》という論文は、中国中央編訳局が担当した日本語版の中国共産党第十九回全国大会の報告書を対象に、「实践」という言葉を取り上げ、原本及び英語訳との比較をもとに、日本語訳の問題点を見出そうとした。さらに、中央文献のような政治文献を日本語に翻訳する際の指針とストラテジーについて、まず、翻訳者としては異文化コミュニケーションの意識を強く持たなければならない。翻訳する前に、異文化コミュニケーションの見地に立ちながら諸要素を詳細に分析すべきである。また、翻訳を行う際に、コミュニケーションの要素に十分な注意を払いながら、訳文の完全性と信憑性の確保を前提に、各種の翻訳ストラテジーを柔軟に共用するのも大切である。さらに、訳文の客観性を保証するために、中日文化間の共通点と相違点を客観視する必要がある、などを主張している。

童富智・修剛《基于语料库的中日对应词语义韵对比研究——以中央文献日译「坚持（する）」为例（コーパスに基づく中日対応する語彙の意味的韻律についての対照研究——中央文献の翻訳における「坚持（する）」を一例に）》という論文は、拡張意味単位モデルを理論的枠組みとして、コーパスから例文を抽出し、中日同形語“坚持”/「坚持」がコロケーションや意味的韻律といった方面に現れた異同点を記述、考察した。マクロの視点からみれば、政府組織、原則、方針などと高い頻度で共起し、肯定的評価を表す点において中日両言語は共通している。一方、ミクロの視点となると、日本語は「名詞＋を＋動詞」のような句構成に傾くのに対し、中国語には「動詞＋名詞」のような句構成の方が多くあると論じている。また、中国語の意味的韻律は複雑であるが、日本語は殆ど中性的評価に属している。

1.4 語史

周菁《“伟大”的词源及词义变迁——基于汉日语言接触的视角（「偉大」の語史及び意味の変遷について——中日言語交渉の視点から）》は、中日同形容動詞“伟大”／「偉大」を研究対象に、コーパスを含んだ古代から20世紀初期までの文献をまとめて調査したうえで、以下のことを指摘している。“伟大”は中国の漢籍から出た漢語であるが、最初は体の巨大さを形容するのに用いられた。この漢語形容動詞は日本に伝わって以降、19世紀後半に抽象的な物事が立派でよいという新たな意味が派生したが、中国に回流し、漢籍に見られる古い意味に取って代わったのは19世紀末である。

周菁《近代日語中漢語形容詞の源流——以常用中日同形詞为中心（近代日本語における漢語形容詞の源流——常用の中日同形語を中心に）》は、コーパスや史料などについての調査に基づき、近代日本語における漢語形容詞の源流を辿るとともに、それらの漢語形容詞は主に漢籍から出自することを明確化させた。その事実を踏まえて、近代に至っても漢語は依然として日本語に多大な影響を与えたという結論を提示した。一方、日本人が作り出した和製漢語は総語彙の4割を上回り、しかも殆ど中国語に借用されたことも明らかになったが、近代日本語も中国語に影響をもたらしたことを反映している。

劉先飛《近现代“文艺”概念在中国和日本的双程流传（近現代の「文芸」という意味概念の中日両国における双方向の伝播）》という論文は、近現代の意味を持った「文芸」という言葉における清末民国初期の確立、及び中日両国間の伝播プロセスについて通時的に考察を試みた。まとめて言えば、漢語であった“文艺”は元々詩文及び創作技巧を指したが、明治時代になると、日本語に借用され、西洋知識、観念体系などの概念を翻訳するのに用いられた。20世紀以降、日本人は新しい意味素をこの言葉に付け加えることで新たな意味を内包した文芸概念を作り上げ、かつ留日学生を介して中国に戻り、さらに中国語における“文艺”の概念変遷を引き起こした。

張守祥・于湘泳《清末民初中日语言接触发生的要素分析（清末民国初期における中日言語交渉の要素についての分析）》は、日本語史料を研究対象に、

清末民国初期の中国東北地域における中日言語交渉の状態を系統的に考証するとともに、両言語の交渉は中国語の語彙に影響を与えたことを浮き彫りにした。例えば、「飯々」を代表とした数多くの混種語の形成と使用はその証拠の一つである。

顧燁青《日语“図書館” 词源考（日本語「図書館」の語源についての研究）》という論文は、史料に対する調査をもとに、「library」の日本語訳語について、最初は「書楼」「文庫」「書庫」「書府」などいくつか併存したが、徐々に「書籍館」に統一され、最後は「図書館」に変遷し、日本語で定着したと論じている。また、日本語の「図書館」と中国語の“图书馆”の関連性についても考察を行った。日本語の「図書」は確かに中国の古典語に由来しているが、「図書館」が中国語から借用された証拠は見つからない。それに対し、中国語の“图书馆”が日本語から影響を受けたのは確かなことである。

孫大権《現代“銀行” 一词的起源及其在中、日两国间的流传（現代語「銀行」の起源及び中日両国間の伝播）》は、概念史と経済史の研究方法を共用し、中日同形語“銀行”／「銀行」の語源及び中日両国間の伝播過程をめぐり、系統のかつ詳細な記述と考究を施した。“銀行”は中国で早くも宋代に用例が見られたものの、現代的概念を意味する“銀行”は1860年代の外商信用機構に使用された“银号洋行”の略語である。当時の“銀行”は中国から日本に東漸したが、19世紀の末に日本で「中央銀行」などの新語が派生し、再び中国語に回流した。

朱棠《中日同形词“章程”的语义演变（中日同形語「章程」の意味変遷について）》では、辞書と新聞データベースなどを利用することによって、中日同形語“章程”／「章程」の語源と意味を検討した。「章程」は中国語出自の言葉で、「法令、法規」から「節氣と度量衡の推算方法」、「規範、準則」、「事務を執行する細則」までのような意味変遷を経た。また、「節氣と度量衡の推算方法」を除く意味は全て日本語に借用されたことも解明された。

鄭艷《《申报》中所见日语借词“重婚”的受容过程研究（『申報』における日本語借用語“重婚”の受容過程についての研究）》という論文は、『申報』（1872-1949）を対象に、日本語出自の借用語“重婚”をすべて抽出した

うえで、社会背景と関連させながらその使用状態を探求した。中国の漢籍にも“重婚”の用例があるが、「重縁」「再婚」という意味であった。この意味は1935年以降の『申報』では消えてしまい、日本語からの新たな意味が取って代わり、配偶者のある人が重ねて結婚することを指すようになり、徐々に中国語で定着するようになったという分析結果を得た。

鄒文君《关于中日同形词“基因”的词史研究（中日同形語「基因」の語史についての研究）》では、通時的な視点から日本語の「基因」の語史を探究することによって、「基因」は同音の「起因」から変遷したことを解明した。また、語構成に関する分析に基づき、「基因」は漢語の“原因”の影響も受けたと推測し、さらにそれを検証するために、中国語の“基因”の変遷過程も辿ってみたが、確かにその通りであった。このように中日同形語“基因”／「基因」の間には借用関係がないという見方を覆したことは、注目を要するであろう。

肖江樂《中日近代词汇环流个例研究——“认识”词义的演变（中日近代語彙の還流についての事例研究——「認識」の意味変遷）》は、中国と日本が近代社会へ転換する歴史を背景に、言語交渉と語彙借用の視点から中日同形語“认识”／「認識」について溯源と解説を行った。結果として、以下のことがまとめられる。“认识”は最初、中国の白話小説で頻繁に使用された言葉であったが、宣教師に英語辞書の翻訳に用いられ、1870年代以降、この言葉は英和辞書と一緒に日本に伝わった。1880年代にいたると、日本の知識層は新たな意味を派生させ、心理学や哲学、倫理学といった分野で學術語として使いはじめた。甲午戦争が終わった後、留日の中国人学生が書籍の翻訳に取りかかったことにともない、「認識」は新たな意味を携えながら中国語に復帰したと言及している。

1.5 意味

曹金波・王丹《从认知视角看日汉“猫”的概念隐喻（認知の視点からみる日中両国語における「猫」に関する概念メタファー）》は、概念メタファー理論に基づき、日中両国語における猫に関するメタファーモードとしてそれ

ぞれ「人」と「物」というターゲットドメインに分類したことによって、日中両国語の共通点と相違点について総合的に分析、考究を試みた。共通点としては、両国語とも猫を「無能、取るに足りない、つまらない人／物」として喩えて言っている。対して相違点とえば、日本語では「正直、おとなしい人」、中国語では「敏感な人」を猫で比喩したりすると説いている。さらに、猫に関する動物メタファーに見られる両国語の共通点はほかでもなく「猫」という同じ動物に対する両国民の共通認識に、一方、相違点は両国の自然風土、民族文化及びものの考え方等の差異に起因するのではないかと指摘している。面白い試みではあるが、その異同に関する追究は継続してほしい。

張怡春《流行词“吐槽”语义泛化解析（流行語における“吐槽”（愚痴る）の意味一般化についての分析）》では、中国の新聞を研究資料として“吐槽”の意味用法と使用状況を調査したうえで、定量的に統計、分析を行い、日本語からの借用語である“吐槽”（愚痴る）の意味用法の一般化についてその過程の究明を探究した。日本のアニメ、オンラインゲームなどの影響を受けながら、“吐槽”（愚痴る）は日本語から中国語に侵入し、さらに市民権を得た新語として登場して一般化への変身を遂げた。そして遂に第七版『現代漢語辞典』（2017）に収録されるようになったと指摘している。

華迪聖《关于「痛い」「疼く」と“痛”“疼”的汉日对比研究——基于辞典与语料库的考察（「痛い」「疼く」と“痛”“疼”の中日比較研究——辞書とコーパスを資料としての考察）》は、それぞれの意味機能と使用状況について、比較、考察を行った。その結果は「痛い」「疼く」と“痛”“疼”の共通点は、生理と心理上の苦しみ、苦痛を表しているが、表象の注目点によって使用の差異が生じてくるという。また、「痛い」「疼く」と“痛”“疼”は、それぞれ独自の意味合いを持っているが、生理上の苦しみを表す際に、中国語の“痛”と“疼”は殆ど生理的苦痛を含んでいる。一方、日本語の場合は、傷口などが脈打つような痛み、ズキンズキンと痛むときに限って使われていると説いている。

魏海迪《汉日四字熟语“天衣无缝”和「天衣無縫」的对比研究（四字熟語

の“天衣无縫”と「天衣無縫」についての比較研究)》は、まず、辞書を使用し両者の辞書の意味を考察した。また、“天衣无縫”と「天衣無縫」について、コーパスから各自の修飾対象を分類、統計することによって、修飾対象及び意味の異同をまとめた。さらに、プリズム理論を施し、両者の生成機能と差異を生じてきた原因などを探っている。

2. 著書

2.1 王志軍《汉日同形词计量研究（中日同形語の計量的研究）》（鄭州大学出版社、2019年）

王志軍は、『漢語國際教育用音節漢字語彙等級劃分』『日本語基本語彙表』を調査、研究資料として、同形語の定義について従来と言説を踏まえて明確化したうえで、操作可能な手順と方法を以って第二言語習得における基本語彙を視野に入れた中日同形語彙表を作り上げた。また、文字学、語彙論、統語論などの視点から、漢字の字形、アクセント、中日同形語の意味、品詞等を巡って比較した。その結果、漢字の字形関係が中日同形語認定の最も重要な手掛かりであることを発見したと同時に、漢字の特徴、意味・品詞の異同についても論じている。中日同形語の大まかな体系的枠組みが浮き彫りになったと言えよう。その内容は以下の8章からなっている。

1. 绪论（序論）

- 1.1 研究意义（研究意義）
- 1.2 研究现状（研究背景）
- 1.3 研究对象（研究对象）
- 1.4 基本内容（研究内容）
- 1.5 研究方法（研究方法）

2. 汉日同形词的研究范式（中日同形語のパラダイム）

- 2.1 引言（前書き）
- 2.2 计量研究的成果（計量研究の成果）
- 2.3 先行研究存在的问题（先行研究の残った問題点）

- 2.4 本章的结论 (本章の結論)
3. 汉日同形词的定義 (中日同形語の定義)
 - 3.1 引言 (前書き)
 - 3.2 概念和概念化、操作化 (概念と概念化、操作化)
 - 3.3 汉日同形词的概念化和操作化 (中日同形語の概念化と操作化)
 - 3.4 本章的结论 (本章の結論)
4. 基本词汇视野下的汉日同形词表的研制 (基本語彙における中日同形語の語彙表の構築)
 - 4.1 引言 (前書き)
 - 4.2 汉、日基本词汇研究概述 (中日基本語彙に関する先行研究)
 - 4.3 二语习得基本词汇视野下的汉日同形词词表 (第二言語習得による基本語彙の中日同形語の語彙表)
 - 4.4 本章的结论 (本章の結論)
5. 汉日同形词表的文字学、语音学分析 (中日同形語の語彙表についての文字学、音韻学の分析)
 - 5.1 引言 (前書き)
 - 5.2 汉日同形词表的文字学分析 (中日同形語の語彙表についての文字学の分析)
 - 5.3 二字音读基本同形词的语音学分析 (音読みの二字漢語についての音韻学の分析)
 - 5.4 本章的结论 (本章の結論)
6. 汉日同形词的语义比较 (中日同形語の意味比較)
 - 6.1 引言 (前書き)
 - 6.2 概念义的比较分类 (概念的意味の比較分類)
 - 6.3 比较过程 (比較の手順)
 - 6.4 比较结果及分析 (比較結果と分析)
 - 6.5 常用度的比较 (使用頻度の比較)
 - 6.6 本章的结论 (本章の結論)
7. 汉日同形词的词性比较 (中日同形語の品詞についての比較)

- 7.1 引言（前書き）
 - 7.2 关于词性和及物性（品詞と他動性〈transitivity〉）
 - 7.3 日语动词的及物性（日本語動詞の他動性）
 - 7.4 汉语动词的及物性（中国語動詞の他動性）
 - 7.5 汉日同形同义动词的及物性比较（中日同形同義の動詞の他動性
についての比較）
 - 7.6 余论（関連する問題）
 - 7.7 本章的结论（本章の結論）
 - 8. 结语（結び）
 - 8.1 本书的结论（本論のまとめ）
 - 8.2 今后的课题（今後の研究課題）
- 参考文献（参考文献）

- 2.2 李葉《汉日语言中数及含数四字成语对比研究（日中両言語における
数字及び数字を含む四字熟語の対照研究）》（上海交通大学出版社、
2019年）

李葉は「出典元」と「構成」について日中両言語における「一」から「十」までの数字を含む四字熟語を分類し、統計をとり、全体像を把握したうえで、その全体像を図式化し、比較対照図を構築した。そのうえ、言語学的及び認知言語学的観点を合わせて、日中両言語における数字を含む四字熟語が持っている意味用法をめぐって研究を行った。さらに、日中両国のそれぞれの歴史、習慣、発想などのいわゆる文化的要素が、それら四字熟語に対してどのように影響しているかについて究明した。その内容の目次は以下の通りである。

第一章 序論

- I. 問題提起
- II. 研究のカテゴリー
- III. 研究目的
- IV. 研究方法

第二章 用語の定義と先行研究

I. 用語の定義

II. 先行研究

第三章 日中両言語における数字を含む四字熟語の対照考察

I. 数字「一」

1. 日中両言語における数字「一」の意味分析
2. 日中両言語における数字「一」を含む四字熟語の全体像
3. 数字「一」を含む四字熟語の対照考察
4. 数字「一」及びそれを含む四字熟語に関する日中文化

II. 数字「二」

1. 日中両言語における数字「二」の意味分析
2. 日中両言語における数字「二」を含む四字熟語の全体像
3. 数字「二」を含む四字熟語の対照考察
4. 数字「二」及びそれを含む四字熟語に関する日中文化

III. 数字「三」

1. 日中両言語における数字「三」の意味分析
2. 日中両言語における数字「三」を含む四字熟語の全体像
3. 数字「三」を含む四字熟語の対照考察
4. 数字「三」及びそれを含む四字熟語に関する日中文化

IV. 数字「四」

1. 日中両言語における数字「四」の意味分析
2. 日中両言語における数字「四」を含む四字熟語の全体像
3. 数字「四」を含む四字熟語の対照考察
4. 数字「四」及びそれを含む四字熟語に関する日中文化

V. 数字「五」

1. 日中両言語における数字「五」の意味分析
2. 日中両言語における数字「五」を含む四字熟語の全体像
3. 数字「五」を含む四字熟語の対照考察
4. 数字「五」及びそれを含む四字熟語に関する日中文化

VI. 数字「六」

1. 日中両言語における数字「六」の意味分析
2. 日中両言語における数字「六」を含む四字熟語の全体像
3. 数字「六」を含む四字熟語の対照考察
4. 数字「六」及びそれを含む四字熟語に関する日中文化

VII. 数字「七」

1. 日中両言語における数字「七」の意味分析
2. 日中両言語における数字「七」を含む四字熟語の全体像
3. 数字「七」を含む四字熟語の対照考察
4. 数字「七」及びそれを含む四字熟語に関する日中文化

VIII. 数字「八」

1. 日中両言語における数字「八」の意味分析
2. 日中両言語における数字「八」を含む四字熟語の全体像
3. 数字「八」を含む四字熟語の対照考察
4. 数字「八」及びそれを含む四字熟語に関する日中文化

IX. 数字「九」

1. 日中両言語における数字「九」の意味分析
2. 日中両言語における数字「九」を含む四字熟語の全体像
3. 数字「九」を含む四字熟語の対照考察
4. 数字「九」及びそれを含む四字熟語に関する日中文化

X. 数字「十」

1. 日中両言語における数字「十」の意味分析
2. 日中両言語における数字「十」を含む四字熟語の全体像
3. 数字「十」を含む四字熟語の対照考察
4. 数字「十」及びそれを含む四字熟語に関する日中文化

第四章 まとめ

おわりに

2019年と比べてみると、2020年度に『日語学習與研究』『東北亜外語研究』等の学術誌に掲載された論文はやや増加している。今回、抽出、統計した23本の論文を通して、ある程度、研究動向と現時点で注目される課題が窺える。一つは中央文献に関する翻訳研究は新たな研究課題として注目を要することである。「一帯一路（シルクロード経済帯と海上シルクロード）」政策の実施に伴って、数多くの文献が中国政府等により公表されてきた。それらの文献の外国語訳は、中国政治、政策等を理解、宣伝するべく必要かつ不可欠である。斯様な背景の下で中央文献の翻訳及び翻訳研究は次第に増えるようになる。それを通じて中国の物語及び社会の変動等がリアルに世界中に発信され、「人類運命の共同体」の構築に寄与することになるであろう。二つ目は、中日同形語における形容詞についての研究がはじめて現れているように、中日同形語の研究範囲は一層広まっていくように見える。また、歴史、経済史、文学思想史などいくつかの研究方法を併用しながら学際的な研究が目立っている。とはいうものの、2019年度の国家研究助成金の日中両言語に関する研究プロジェクト7項目と比較すると（施暉2019: 112）、2020年度は上海大学の常志斌による「日本における現代新漢語の伝播についての研究」という、ただ1項目であったことが聊か残念である。国家研究助成金（教育部研究課題も含む）について、李静波は2009年から2018年までのプロジェクトをめぐって考察を行ったうえで、語彙研究は文法研究に対して二番目を占め、長年にわたって蓄積されてきた学者の研究成果とも言えるという。しかし、語彙研究の大多数は日本語を中心とした研究である（李静波2020: 5）。多言語間における語彙の比較研究はまだ少ない現状にある。従って、中日語彙対照研究は急務の課題であることを強調したい。全体的に言えば、中日同形語の比較研究は依然として勢い付いてはいるが、その他の研究はやや少なかつたようである。今後論文の全体的な質の向上、研究方法の工夫及び研究資料の充実化を期待しつつ、筆を擱くことにする。

参考文献

- 曹金波·王丹(2019)《从认知视角看日汉“猫”的概念隐喻》[J],《东北亚外语研究》第3期, pp.41-49.
- 费晓东(2019)《中日同形词听觉加工机制研究》[J],《现代外语》第6期, pp.792-804.
- 顾焯青(2019)《日语“図書館”词源考》[J],《大学图书馆学报》第5期, pp.109-120.
- 何宝年·匡伶(2020)《中日同形词翻译对比研究—以“精神”/「精神」为例》[J],《东北亚外语研究》第1期, pp.85-90.
- 华迪圣(2020)《关于「痛い」「疼く」和“痛”“疼”的汉日对比研究—基于辞典与语料库的考察》[A],《汉日语言对比研究论丛》[C]第11辑, pp.143-160.
- 李叶(2019)《汉日语言中数及含数四字成语对比研究》[M],上海:上海交通大学出版社.
- 李钰婧(2019)《中央文献外译的跨文化交际策略—以十九大报告中“实践”一词的日译为例》[J],《日语学习与研究》第6期, pp.32-39.
- 李静波(2020)《国家课题中的日语语言研究热点与动向分析》[J],《日语学习与研究》第3期, pp.1-10.
- 李宁(2020)《《唐话纂要》唐音同字异读及其日本特色》[J],《东北亚外语研究》第2期, pp.67-73.
- 刘先飞(2019)《近现代“文艺”概念在中国和日本的双程流传》[J],《中山大学学报(社会科学版)》第3期, pp.48-55.
- 刘健(2019)《中国共产党文献日译本中的汉日同形词—以《习近平谈治国理政》日译本中的“四字格”词为例》[J],《日语学习与研究》第6期, pp.25-31.
- 孙大权(2019)《现代“银行”一词的起源及其在中、日两国间的流传》[J],《中国经济史研究》第3期, pp.97-111.
- 施暉(2019)「中国における中日語彙対照研究の動向 2019」[J],『日中語彙研究』第9号, pp.111-124.
- 童富智·修刚(2020)《基于语料库的中日对应词语义韵对比研究—以中央文献日译「堅持(する)」为例》[J],《日语学习与研究》第2期, pp.1-8.
- 吴国华·杨喜昌(2000)《文化语义学》[M],北京:军事谊文出版社.
- 王志军(2019)《汉日同形词计量研究》[M],郑州:郑州大学出版社.
- 魏海迪(2020)《汉日四字熟语“天衣无缝”和「天衣無縫」的对比研究》[A],《汉日语言对比研究论丛》[C]第11辑, pp.161-174.
- 肖江乐(2020)《中日近代词汇环流个案研究—“认识”词义的演变》[A],《高等日语教育》第5辑, pp.91-102.
- 周彤(2020)《汉日同形反义复合词的构成与词汇特征》[J],《日语学习与研究》第3期, pp.40-49.
- 周菁(2020)《“伟大”的词源及词义变迁—基于汉日语言接触的视角》[J],《日语学习与研究》第3期, pp.50-58.
- 周菁(2020)《近代日语中汉语形容词的源流—以常用中日同形词为中心》[A],《汉日语言对比研究论丛》[C]第11辑, pp.129-142.
- 朱棠(2019)《中日同形词“章程”的语义演变》[J],《东北亚外语研究》第3期, pp.34-40.

- 张春丽 (2019) 《从跨文化交际的角度看日语猫谚的翻译—以归化与异化翻译策略为中心》 [J], 《日语学习与研究》第4期, pp. 120-127.
- 张怡春 (2019) 《流行词“吐槽”语义泛化解析》 [J], 《语言教学与研究》第6期, pp. 101-108.
- 张守祥·于湘泳 (2020) 《清末民初中日语言接触发生的要素分析》 [J], 《日语学习与研究》第1期, pp. 50-60.
- 查雁豪·王忻 (2019) 《基于语料库的汉日“超~”的语法化对比研究》 [J], 《杭州师范大学学报(社会科学版)》第6期, pp. 101-109.
- 郑艳 (2020) 《《申报》中所见日语借词“重婚”的受容过程研究》 [A], 《高等日语教育》第5辑, pp. 64-77.
- 邹文君 (2020) 《关于中日同形词“基因”的词史研究》 [A], 《高等日语教育》第5辑, pp. 78-90.

施暉 Shi Hui 蘇州大学外国語学院教授 専門：日本語学・日中言語文化比較